霧島市立（　　）中学校三年　　名前（　　）

霧島市「今週の一問」　中3国語　二月十四日版
進路・夢実現に向けて、この一問をクリアしよう！

【一】　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈これまでのあらすじ〉
京都の罪人が島流しになり高瀬川を下っていく舟に、弟殺しの罪で「喜助」という男が乗せられた。護送役として同乗した同心（当時の警察の仕事をした下級役人）の「羽田庄兵衛」は、喜助がいかにも晴れやかで穏やかな顔をしていることを不思議に思い、こらえきれず、喜助に何を思っているのかを尋ねる。喜助は、島送りになったら仕事が与えられ食べることに困らない上、二百文という金銭をいただいて、ありがたいと言う。

庄兵衛は今、喜助の話を聞いて、①喜助の身の上をわが身の上に引き比べてみた。喜助は仕事をして給料を取っても、右から左へ人手に渡してなくしてしまうと言った。いかにも哀れな、気の毒な境界である。しかし一転してわが身の上を顧みれば、彼と我との間に、はたしてどれほどの差があるか。自分も上からもらう扶持米を、右から左へ人手に渡して暮らしているにすぎぬではないか。彼と我との相違は、いわばそろばんの桁が違っているだけで、喜助のありがたがる二百文に相当する貯蓄だに、こっちはないのである。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄とみて喜んでいるのに無理はない。その心持ちはこっちから察してやることができる。しかし、いかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足るを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。そこで牢に入ってからは、今まで得がたかった食が、ほとんど天から授けられるように、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納が合っている。手いっぱいの生活である。しかるに、そこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ごしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になったらどうしよう、大病にでもなったらどうしようという疑懼が潜んでいて、おりおり妻が里方から金を取りだしてきて穴埋めをしたことなどがわかると、この疑懼が②意識の閾の上に頭をもたげてくるのである。

いったいこの懸隔はどうして生じてくるだろう。ただうわべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだといってしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が独り者であったとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもっと深いところにあるようだと、庄兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というようなことを思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一のときに備える蓄えがないと、少しでも蓄えがあったらと思う。蓄えがあっても、またその蓄えがもっと多かったらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやらわからない。それを今、目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た。

（森鴎外「高瀬舟」による　かごしま学力向上ＷＥＢシステム問題を一部改変）

（注）境界…その人のおかれた状況。境涯。
口を糊する…やっと生活をする。
意識の閾…意識と無意識との境。
扶持米…武士に給与として与えられた米。
懸隔…二つの物事の間の隔たり。
係累…面倒をみなければならない親・妻子など。
鳥目二百文…鳥目は金銭の種類。
疑懼…疑いおそれる。

問一　〜部「ない」と同じ働きをするものを次から選び、記号で答えよ。

ア　今は読まない。　イ　何の感動もない。　ウ　全く楽しくない。　エ　まだまだ練習が少ない。

問二　——部①「喜助の身の上をわが身に引き比べてみた」とあるが、庄兵衛は喜助と自分のどのようなところを比べているか。本文中の言葉を用いて、二〇字以上、二十五字以内で答えよ。

問三　——部②「意識の閾の上に頭をもたげてくる」を説明したものとして、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　日頃の幸いとも不幸とも感じないことを意識すること。
イ　無意識だった不安がふと意識して感じられること。
ウ　大病を患い、意識がもうろうとしてしまうこと。
エ　大病にかからないように、意識を確かにもつこと。

問四　次の文章は、森鷗外の息子である森於菟が記したものである。この文章から、森鷗外と「喜助」には共通点があることが分かる。その共通点を本文中（『高瀬舟』）から十七字で抜き出して答えよ。

○　父の平常の生活ははなはだ簡素で祖母や母の作った惣菜料理で不平なく、それもあまり味の濃くないかつ柔らかに煮た野菜を好んだ。軍医部長、医務局長、博物館総長として出張の時は卵焼き、梅干し以外は口にせず、役所への弁当には握飯（にぎりめし）や食麺麭（食パン）などが入れてあった。

問五　授業の中でこの文章を読み、喜助と庄兵衛がどのような人物であるか、意見交換を行いました。その中で、山田さんと鈴木さんは次のように考えました。二人の意見のうちどちらかを選び、そう考えられる理由を次の条件に従って書け。

山田さん＝「喜助は、無欲で感謝を忘れない人物だ。」　鈴木さん＝「庄兵衛は、人間味あふれる人物だ。」

〈条件〉
・本文中に述べられている内容をもとに、その根拠・理由を書くこと。
・五十字以上、七十字以内で書くこと。

霧島市立（　　）中学校三年　　名前（　　）

霧島市「今週の一問」　中3国語　二月十四日版
進路・夢実現に向けて、この一問をクリアしよう！

【一】　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈これまでのあらすじ〉
京都の罪人が島流しになり高瀬川を下っていく舟に、弟殺しの罪で「喜助」という男が乗せられた。護送役として同乗した同心（当時の警察の仕事をした下級役人）の「羽田庄兵衛」は、喜助がいかにも晴れやかで穏やかな顔をしていることを不思議に思い、こらえきれず、喜助に何を思っているのかを尋ねる。喜助は、島送りになったら仕事が与えられ食べることに困らない上、二百文という金銭をいただいて、ありがたいと言う。

庄兵衛は今、喜助の話を聞いて、①喜助の身の上をわが身の上に引き比べてみた。喜助は仕事をして給料を取っても、右から左へ人手に渡してなくしてしまうと言った。いかにも哀れな、気の毒な境界である。しかし一転してわが身の上を顧みれば、彼と我との間に、はたしてどれほどの差があるか。自分も上からもらう扶持米を、右から左へ人手に渡して暮らしているにすぎぬではないか。彼と我との相違は、いわばそろばんの桁が違っているだけで、喜助のありがたがる二百文に相当する貯蓄だに、こっちはないのである。

さて桁を違えて考えてみれば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄とみて喜んでいるのに無理はない。その心持ちはこっちから察してやることができる。しかし、いかに桁を違えて考えてみても、不思議なのは喜助の欲のないこと、足るを知っていることである。

喜助は世間で仕事を見つけるのに苦しんだ。それを見つけさえすれば、骨を惜しまずに働いて、ようよう口を糊することのできるだけで満足した。そこで牢に入ってからは、今まで得がたかった食が、ほとんど天から授けられるように、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覚えたのである。

庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米で立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納が合っている。手いっぱいの生活である。しかるに、そこに満足を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ごしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になったらどうしよう、大病にでもなったらどうしようという疑懼が潜んでいて、おりおり妻が里方から金を取りだしてきて穴埋めをしたことなどがわかると、この疑懼が②意識の閾の上に頭をもたげてくるのである。

いったいこの懸隔はどうして生じてくるだろう。ただうわべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだといってしまえばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が独り者であったとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもっと深いところにあるようだと、庄兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というようなことを思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一のときに備える蓄えがないと、少しでも蓄えがあったらと思う。蓄えがあっても、またその蓄えがもっと多かったらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやらわからない。それを今、目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

庄兵衛は今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た。

（森鴎外「高瀬舟」による　かごしま学力向上ＷＥＢシステム問題を一部改変）

（注）境界…その人のおかれた状況。境涯。
口を糊する…やっと生活をする。
意識の閾…意識と無意識との境。
扶持米…武士に給与として与えられた米。
懸隔…二つの物事の間の隔たり。
係累…面倒をみなければならない親・妻子など。
鳥目二百文…鳥目は金銭の種類。
疑懼…疑いおそれる。

問一　〜部「ない」と同じ働きをするものを次から選び、記号で答えよ。

ア　今は読まない。　イ　何の感動もない。　ウ　全く楽しくない。　エ　まだまだ練習が少ない。

イ

問二　——部①「喜助の身の上をわが身に引き比べてみた」とあるが、庄兵衛は喜助と自分のどのようなところを比べているか。本文中の言葉を用いて、二〇字以上、二十五字以内で答えよ。

給料や扶持米を右から左へ人手に渡しているところ

問三　——部②「意識の閾の上に頭をもたげてくる」を説明したものとして、最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　日頃の幸いとも不幸とも感じないことを意識すること。
イ　無意識だった不安がふと意識して感じられること。
ウ　大病を患い、意識がもうろうとしてしまうこと。
エ　大病にかからないように、意識を確かにもつこと。

イ

問四　次の文章は、森鷗外の息子である森於菟が記したものである。この文章から、森鷗外と「喜助」には共通点があることが分かる。その共通点を本文中（『高瀬舟』）から十七字で抜き出して答えよ。

○　父の平常の生活ははなはだ簡素で祖母や母の作った惣菜料理で不平なく、それもあまり味の濃くないかつ柔らかに煮た野菜を好んだ。軍医部長、医務局長、博物館総長として出張の時は卵焼き、梅干し以外は口にせず、役所への弁当には握飯（にぎりめし）や食麺麭（食パン）などが入れてあった。

欲のないこと、足るを知っていること

問五　授業の中でこの文章を読み、喜助と庄兵衛がどのような人物であるか、意見交換を行いました。その中で、山田さんと鈴木さんは次のように考えました。二人の意見のうちどちらかを選び、そう考えられる理由を次の条件に従って書け。

※喜助を選んだ場合は「喜助は」で、庄兵衛を選んだ場合は「庄兵衛は」で書き始めること。

山田さん＝「喜助は、無欲で感謝を忘れない人物だ。」　鈴木さん＝「庄兵衛は、人間味あふれる人物だ。」

〈条件〉
・本文中に述べられている内容をもとに、その根拠・理由を書くこと。
・五十字以上、七十字以内で書くこと。

例　喜助は仕事を見つけるのに苦労し、もらった給料もすぐ人の手に渡るような厳しい生活や、祖馬流となった状況でも、満足することができているから。